

いま、世界各地で、数十年に一回規模の現象である「異常気象」が多発しています。

干ばつが原因とされるオーストラリアの森林火災では、国土の約五分の一が焼失しました。南極では、この五十年で平均気温が三度上昇したと言われ、今年、観測史上初めて二〇度を超え、最高気温、二〇・七度が観測されました。

アフリカ東部では、サバクトビバッタが大量発生し、農業を中心とした経済生活に甚大な被害をもたらし、食糧不足が懸念されています。

国内においても、昨年十月に、日本列島を直撃した台風十九号、さらには、本年七月に熊本県を中心に九州や中部地方などで発生した「令和二年七月豪雨」の被害は、記憶に新しいでしょう。

このように、極めて近い時期に起きた異常気象や自然災害だけでも、枚挙にいとまがありません。

倫理法人会憲章の活動指針の五つ目「自然を畏敬・親愛し、『地球人』たる自覚を深め、環境の保全と美化に貢献する」はいま、全人類が共通で取り組み、実践すべき項目であると言っても過言ではないでしょう。

倫理研究所二代目理事長・丸山竹秋は、地球倫理の対象を次の四つにまとめました。

- ① 人間の、人間に対するみち
  - ② 人間の、地球生物に対するみち
  - ③ 人間の、地球無生物に対するみち
  - ④ 人間の、宇宙天体に対するみち
- すなわち、地球倫理とは地球（宇宙を含



## 人間には国境があっても 自然界に国境はない

めて）のすべての命に対する「人のみち」なのです。

倫理研究所では、毎年五月のゴールデンウィーク期間に、十八歳から二十八歳までの未婚者を対象とした「沙漠緑化青年隊」を中国に派遣し、内蒙古自治区恩格貝を拠点に、クブチ沙漠で植林活動を行ないます。

この隊の特徴は、日本から派遣する青年だけでなく、中国国内の大学からも約百名の学生が合流し、交流を図ることです。

日本の青年は青色の帽子をかぶり、中国の学生は赤色の帽子をかぶり、一緒に沙漠に木を植えます。すると、初日は別々に植林活動を行なっているにもかかわらず、二日目には赤色の帽子が混合して、お互いに手を携えながら木を植える様子が目立ってきます。

地球の大地と向き合いながら、約五日間、共に過ごすと、言語や政治、文化などを越えたつながりが生まれてくるのです。

植林活動の最終日、涙を流しながら別れを惜しみ抱き合う姿は、まさに国境を超えた「地球人」と言えるでしょう。

海が汚れば魚が住めなくなり、山が枯れば動物が生活できなくなるように、地球が壊れれば人類の幸福はありません。

環境保全は、人類が守るべき使命なのです。使命を自覚し、何をすべきか決意・決断した実践には、国境の隔たりはないでしょう。

私たちは「地球人」としての自覚を深め、地球に感謝することからはじめ、その感謝を形に表わし、「地球をよくする」と決意・決断して、日常生活を送りたいものです。